男性保育者による「保育者」定義のシーケンス

中 田 奈 月

要 約

近年、女性しか従事しないと考えられてきた保育職に参入する男性が増加している。男性保育者の存在は我々がイメージしてきた「保育者」像を大きくゆるがす。そのため女性保育者や保育所所長は彼らを不必要だと考えたり矛盾した期待をしたりする。そんななかで男性保育者は周囲の人々の期待にどうこたえ男性保育者であり続けるのか。男性保育者の経験に伴って変化する男性保育者自身の「保育者」定義に着目して分析する。分析の結果、男性保育者の「保育者」定義にはシーケンスがあり、そこには3段階あると分かった。それらの定義は、優しく世話好きでケア労働を好むといった従来の「保育者」定義とは大きく異なる。第1段階、彼らは自らを保育所の父と定義する。第2段階、ある程度経験をつんだ男性は、ジェンダーの偏りを是正する者として男性の視点を取り入れようとする。そして第3段階、かなり経験をつんだ男性は、子どもの発達を促す者として保育をしていた。

キーワード：男性保育者、性別職域分離、シーケンス分析

2004, 家族社会学研究, 16(1): 41-51

Sequence Analysis of a Definition of the “Childcare Workers”

by Male Childcare Workers

Natsuki Nakata

Abstract

There has been a recent increase in the number of males working under the same labor conditions as females. The male childcare workers certainly upset the image people expect of “childcare workers.” Since females and nursery directors aren't used to working with males, they consider that males in the field are unnecessary or that they would act contrarily to expectations. How do males actually respond to these expectations? When carrying out childcare work, how does males' “childcare worker” concept change? A qualitative investigation analysis can provide the answer.

The result of the analysis shows that the definition of the “male childcare worker” concept actually progresses through three phases, which are separated by the degree of experience. The first phase is that males beginning work as childcare workers are considered as substitutes for domestic parents. The second phase is that males with several years of experience become childcare workers who provide a masculine viewpoint, in order to correct the gender bias. In the third phase, very experienced males are no longer identified by their gender, but simply as “childcare workers”.

Key words: male childcare worker, occupational gender segregation, sequence analysis

2004, Japanese Journal of Family Sociology, 16(1): 41-51

I. 男性保育者であり続けることとは どのようなことか

職業のなかには伝統的に一方の性に偏っているものがある。我々は、医師や弁護士は男性で、保育者や看護師は女性だと想像するだろう。「外科医」に対しては男性で客観性を持ち自律性がある専門職だと想像したり、「保育者」に対しては女性で優しく世話好きでケア労働を好み、その職業は医師など男性が多くを占める専門職よりも社会的地位が低いと想像したりする。この職業に付随するイメージは法律上の規定にもとづくものではなく、我々の期待によって成立した認識枠組にすぎない。だがその想像と実際とがそぐわない時、我々は違和感を覚える。我々が男性保育者に対して違和感を覚えるのは、「保育者」と「男性」とが相いれないように感じるからである。

先行研究の多くは性別職域分離現象の発生している職業について、男性が女性職に参入する場面をあまり取り上げてこなかった。男性は女性職に参入することはなく、たとえ従事しても男性は暫定的に女性職に従事するか、女性とは別の地位で別の職務に従事する (Wharton, et al., 1987; West, et al., 1987; Williams, 1992) と考えられていたからである。だが現実には、女性職へ女性と同じ地位で参入する男性は増加傾向にある⁽¹⁾。

「保育士」は、医師や弁護士などと同様、資格名がそのまま職業名になっている職業である。男性が児童福祉施設で「保母に準ずる」という資格を取得できるようになった1977年から1999年まで、男性には職名がなかった。当時、保育者の職名は「保母」だったが、法律上この職名を用いることができるのは女性に限られていたからである。そのため男性従事者は自らが従事する職業を名乗ることができないという状態に陥った。この状況を克服するために男女統一名称ができる1999年まで彼らが用いたのは、男性保育者という通称だった。だが男性保育者にとって職名以上に問題となったのは、「なぜ男性は保育者であり

続けるのか」と、男性であるにもかかわらず「保母に準ずる」仕事をするものの意義を常に問われることであった。男性も保育者としての資格が得られれば、その職業に従事することに何ら問題はないはずである。だが男性保育者の存在は、我々がイメージしてきた「保育者（保母）」像を大きくゆるがす。なぜなら保育職は女性に従事することを前提に成り立っているため、男性保育者の周囲の女性保育者や保育所所長は彼らをどう扱っているかわからなくなってしまうからである。周囲の人々は「保育者」と「男性」との間の違和感を解消するために、男性が保育職に従事するのにふさわしい免許や資格を持っていたとしても採用を見合わせることもある。さらに男性が女性とともに保育をしていく立場になっても女性の仲間に入れないようにしたりして彼らを排除しようとするのである。そのうえ保育者になった男性に対して「なぜ男性は保育者であり続けるか」と、彼らの存在意義を常に問いつづける。つまり「保育士」とは職業名であり資格名であると同時に、その職業に従事するのにふさわしい人とふさわしくない人とを区別する作用を持つ認識枠組なのである。

それでは男性保育者自身は「保育者」をどう定義し、保育者であり続けるか。中田によると、男性保育者による「保育者」定義にはパターンがあり、そのパターンは、加齢や経験の積み重ね、女性保育者との人間関係上のトラブルなどの影響によって生み出される (中田, 2002)。だがそれらの「保育者」定義のパターンは突如としてあらわれ維持されるものなのか。A. Straussによると、その定義は移行するだけでなく、その移行はある程度制度化されている。そしてその移行は「過去の、かつてそうであった私と同じではない」という認識を人に強いるような出来事によって生じ、その移行した段階についての解釈は社会によって用意されている (Strauss, 1959=1997: 128)。この議論にのっとれば、男性保育者自身の「保育者」定義には共通した一連のシーケンスがあり、次の段階への移行は何らかの出来事を契機としてな

されることになる。だが男性保育者の「保育者」定義にそのような一連のシーケンスを見出すことが可能なのか。本稿はこの観点から、男性保育者が職務に従事するなかで変容する「保育者」定義のシーケンスを質的調査の分析から追究する。以下、II節ではいくつかの事例を紹介し、III節で男性保育者による「保育者」定義のシーケンスを探る。IV節では男性保育者自身が「保育者」をどのように再定義するか、その契機となる出来事とは何かをみていく。

II. 男性はどのように保育者であり続けるのか

男性保育者の「保育者」定義に一連のシーケンスを見出すことは可能か。これら进行分析の前に、経験年数が異なるいくつかの事例を簡単に紹介する。本稿で用いるデータは1995年から2001年に男性保育者21名を対象に複数回実施した面接調査で得られたものである。面接実施場所は保育室や喫茶店で1回あたりの面接調査の所要時間は平均3時間である。調査の記録は匿名による結果の処理を条件に対象者の許可を得て録音した。本節で紹介するのは経験年数が異なる3名である⁽²⁾。

1. X氏の事例

X氏(25歳 保育者経験2年目)は、一生続けられる仕事をしたいと考え保育者になった。だが就職して女性保育者に接し、自分と女性との力量との差に愕然とする。女性保育者の、子どもに対する感覚、子どもをみる目、子どもに対する言葉づかいのうまさを目の当たりにしたX氏は「女性は育児に向いてる」と感じたという。女性保育者は身体全体で楽しさを表現できるのにX氏はそれができず、赤ちゃんが人見知りして泣いたりすることがある。だがX氏は「男女では身体の作り、脳の作りが違う」ために起こることであり、だから保育者の役割も男女で異なるべきであると考えている。

「保育所って母親の代わりに子どもを保育する。

同じように、保育所で父親の代わりに子どもを保育するのは男性で、そこに自分の必要性が出てくる。女性にできない、男性だけができる利点を考えなければって思う。自分はまだ経験がなくて兄貴的なんですけど。今してるのは、サッカー、走る。女の先生って寒い時は外に出なかったりとかあるんで。それから虫取り。」

2. Y氏の事例

Y氏(36歳 9年目)は子どもの発達教育に携わりたいと感じ保育者の道を選んだ。1年目に副担任として経験6年目の男性保育者と組んでクラスを担当した時は自分の思うとおりに保育ができたという。だがY氏は、2年目に担任として副担任の女性保育者とともにクラス運営を任された時に正念場を迎える。子どもをまとめられず、「男性はやっぱりだめだわ」と副担任や別の女性保育者に非難されたのである。Y氏も自分の保育を見直す必要性を感じていた。

「その頃、身体を動かしてちょこちょこするのが理想やったんです。雨の日に子どもと園庭出てぐちゃぐちゃにしたり、本当に身体にまかせていましたから。そういう意味で男性だからちゅうことはあるやろね。」

4年目、彼の勤める保育所で、男性としてはじめて0歳児を担当する。Y氏は0歳児クラスで行われる保育について「子どもの面倒はゆっくりとみたほうがいい」と女性に意見をするが、女性に「これまでどおりで何が悪いのか」と反論され、自信をなくしていった。

「やっぱり女性からみて、男性だから大丈夫かなっていう部分はあると思いますよ。女性のほうが歴史があるんで。それに、頭のなかで0歳の面倒みるのは苦手ちゅうのはあります。直立歩行してへん子どもでしょ。とたんに扱い方が分からなくなる。おむつ替えたりはできるんです。でも、子どもの面倒見の細やかさというのは女性に負けとるなって。自分ができへんってのもあるけど、それだけじゃない気がします。」

Y氏は、自分の保育を再考して自信を取り戻し

たいと考え、保育者になって5年目の時、別の保育所へ主任として転職した。主任になったことで、保育所全体の保育を考えるようになったという。さらに最近、外国の保育を知ったことが転機となったとY氏は語る。

「女性だからって感覚と違う、子どもを抱きかかえたりしないんです。子どもと離れて、でも愛情は感じる。日本の保育は独特で、包み込んだり抱いたりっちゃうのが多いけど、それだけでは疑問です。0から6歳までの子どもの教育に携わる人間は男性も女性も関係ないです。せやけど女性は感情的に物事をとらえる面はあると思います。男性は静的に物事を客観的にみる能力に長けてるような気がするね。どっしり座って見守るような保育がしたいですね。」

Y氏は男性という性的属性を活かした保育を志すが、それは、これまで女性だけで培われてきた保育界をさらに進展させるためである。だからその保育は家庭の延長としての保育ではなく、父親の代わりの保育でもない。なぜならどんなに優れた保育者でも「親にはかなわない」からである。さらにいえば「保育のほうが育児よりも枠が大きい」。なぜなら保育は「家庭の育児ではできない、発達教育の要素が入る」からである。

3. Z氏の事例

大学時代に社会福祉を学んだZ氏（44歳 19年目）は専門を活かしたいと考え保育者の道を選んだ。就職して2、3年は「自分の保育」がなかったためにむやみに身体を使ったと語る。女性保育者に「子どもに風邪をひかせたりケガをさせたりしたらどうするのか」と注意されたが、Z氏は注意ばかりで自ら動かない女性保育者に疑問を感じ、こういう面でこそ自分の力を見せようとした。

「当時言われたんです、お兄さんの保父さん、お父さんの保父さん、ガキ大将的な保父さん、おじいちゃんみたいな穏やかな保父さん、いろんなタイプの保父さん像を。自分はどれにも属さない、そのかわり、どれにも当てはまる。」

それから10年間、Z氏は女性より保育が下手だと実感しつつも女性のようにやりたくないという思いが強く、いきづまりを感じていたという。だが15年目、16歳年上の女性保育者との出会いがZ氏の考え方を大きく変えた。Z氏と同じクラスの担任になった彼女に自分の保育を批判されたことがきっかけとなり、彼女と保育についてじっくり語り合う機会を得たのである。

「それまでは保育ってカリキュラムや設定内容が決まっていて、それを通じて子どもが発達すると思っていました。気持ちを育てるとか口では言っても、やはり手のひらに乗っけたって。そうやってしまってるのを（その保母に）気づかせてもらった。保母にもいい人がいるって見習えるようになった。以前は、保母と言い争いすらできなかったんです。」

この出来事をきっかけにZ氏は保育に積極的になったという。さらにZ氏は40歳で、かねてから希望していた0歳児、1歳児のクラス担任をまかされた。これまでは女性保育者に「男性は乳児に向いていない」「あなたは幼児向き」などと言われ担当させてもらえなかったのである。

「6ヶ月違ったら1年ぐらい発達段階が違うような0歳1歳（の担当）は、大変勉強になりましたよ。最初の3ヶ月、男の先生がだめだって泣いてた子がいてね。その子がはじめて『Zセンス』って抱きついてくれた時は嬉しかった。結局、人見知りなんだけど、個人差があるから。」

現在Z氏が求めるのは、集団保育の場で子どもが気持ちを育てることである。そのためには子どもが楽しさを実感できて、それを保育者や友達も共感することのできる環境を作ることが必要だということである。

「母性が大事と言う人もあるけど、それはスキップと言われることもある。男性でも女性でも関係なしに、年齢が低ければ低いほど、子どもを抱きしめてあげることは非常に大事。今は『男の保育』を意識しないし、そんな保育をやろうとも思わないね。保父さんの立場からどう思うかと

言われると、え？って逆に聞きたくなる。俺なりの感じ方は言えるけど、男性だからってそんな特別の感じ方はないって言いたいね。」

以上、X氏、Y氏、Z氏の事例を紹介した。これらの事例は、保育経験年数や担当した子どもの年齢、保育所の環境が様々で、各々の経験は全く異なっているように見える。これら3名の「保育者」定義には何らかの共通性があるのか。次節で分析しよう。

III. 「保育者」定義の再編成

前節で、X氏、Y氏、Z氏の事例を紹介した。彼らの経験は様々で、そこには何ら共通性がないように見えるかもしれない。だが様々に見える経験から「保育者」定義に一連のシーケンスを見出すことができるのではないか。そのための手がかりになるのが男性保育者の経験年数である。以下、男性保育者の経験年数を手がかりに「保育者」定義をみる。

1. 「第二の家庭の父母」の段階

保育者になってまもない頃、男性保育者は「保育者」をどう定義しているのか。保育者になって2年目のX氏によると、男女は「身体の作り、脳の作り」から役割まで異なるものである。だから男性は育児に向いていなくてもかまわない、なぜなら男性保育者は母親ではなく、家庭の父親の代わりに保育所で父親になることが求められるから、とX氏は考えている。もっとも現在のX氏は「まだ経験がなくて兄貴的」な保育者である。他方、Z氏が保育者になって最初の2、3年の頃「どれにも当てはまった」のは「お兄さんの」「お父さんの」「ガキ大将的」「おじいちゃん」という「保育者」である。Z氏はこれらの期待に反発感を抱きながらもその期待を受け入れている。

このように、保育職に参入してまもない時期にあるX氏やZ氏は、家庭における男性像になぞらえて自らを位置づける。つまり、この段階にある男性は、「保育所」を「第二の家庭」、「保育者」を「第二の家庭における父母」と定義していると

解釈できる。「第二の家庭の父母」という定義は家族メンバーと保育者との同一視から生まれる。この同一視は保育者の旧職名「保母」にも関連している。「保母」は「母代わり」を類推しやすい名称であるために、家庭で母親が行う育児と保育所で女性が行う保育とは同一視されやすい。もっとも女性という属性を持つ者が「保母」なら職名に違和感はないかもしれないが、男性という属性を持つ者にとって職名はそぐわない。他方、男性保育者の通称のひとつである「保父」は、男性という属性のみならず「父代わり」を類推しやすい。そのため男性保育者が、家庭における父母と同様、保育所にも男女保育者が必要であるという論理を持ち出すのは簡単である。この論理により男性は「なぜ男性は保育者であり続けるのか」という問いにこたえることができ、保育所に自らの居場所を創造できるだけでなく、他者に対しても男性保育者が存在する意義を認めさせやすくなる。

以上のことをふまえてこの段階の男性保育者の「保育者」定義に即すると、女性保育者は「母代わり」、男性保育者は「父代わり」として「性別役割分業」を遂行していると解釈できる。しかしこの「性別役割分業」とは性別で役割を分けることのみを意味しており、男性は公的領域・女性は私的領域に囲い込まれることを意味しているわけではない。なぜなら後者の意味で保育者の役割を解釈すると、「父親」すなわち「男性」は家庭から追いつ出されることになり、「育児」すなわち「保育」に携わることができなくなるからである。男性が「父代わり」として行う保育とは、男性が「育児」すなわち「保育」に携わることができるよう「性別役割分業」を再解釈し創造したものである。

では彼らは「父代わり」としてどのような保育をしているのか。X氏が遂行するのは、サッカーや走ること、虫取りなど、女性の代わりに屋外で身体を使って遊ぶことである。Y氏は2年目に女性保育者とともにクラス運営を任せられるようになると、身体にまかせた動きをする。Z氏も、保育者になって2、3年は、むやみに身体を使ったりと語

以上、経験年数が少ない男性保育者の「保育者」定義をみた。彼らにとって「保育者」とは「第二の家庭の父母」をさすと解釈できる。なかでも男性保育者は「第二の家庭の父」として保育をする。その定義にもとづいて彼らが行うのは「身体を使う」保育である。

ある程度経験を積んだ男性保育者は自らを「第二の家庭の父」とは定義していない。なぜなら保育所は家庭ではないし、男性保育者は「父」ではないだけでなく、保育には育児とは異なり「発達教育の要素が入る」からである。だが彼らは自らを女性保育者と同じ「保育者」とであると定義するわけではない。

では、「男性の視点」にもとづいた保育とは、女性が全くしない保育のことをさすのだろうか。そ

そのため女性保育者の保育とのささやかな違いは誇張される。女性保育者の保育との判別が難しいからこそ男性保育者は「女性のようにやりたくない」と考え、自分の存在価値を訴えるために積極的に男女の違いを見出す必然性が出てくるのである。

46

とった。そしてY氏は「女性に負けとる」と感じる。Y氏は自分よりも「女性保育者」のほうが0歳児保育に関しては優位であると気づくのである。Y氏は0歳児保育の苦手意識を「自分ができへんってのもあるけど、それだけじゃない」と語る。0歳児保育がうまくいかなかったのはY氏自身に0歳児保育の経験がなかったという理由だけによるものではない。「男性保育者」一般が0歳児保育に向いていないために、0歳児保育がうまくできなかったとY氏は解釈したのである。Y氏は、0歳児保育の場で男性保育者は女性保育者に「負ける」と考えたために、女性と同じ土俵に立って0歳児クラスを担当することを避け、別の保育所で「主任」という地位のもとで保育に携わる道を選んだといえる。それによって、自らの優位性を保とうとしたといえよう。

ある程度の経験を積んだ男性保育者についてみた。彼らは「保育者」を「保育の偏りを是正する者」と定義し、それにもとづいて「男性の視点」を強調した保育をしていることが明らかになった。

3. 「子どもの発達をうながす者」の段階

Z氏は今回取り上げた事例のなかでもっとも経験年数が高い男性保育者である。Z氏は「保育者」をどう定義しているか。経験の少ない男性保育者は「保育者」を「第二の家庭の父」と定義しており、その定義の背後には家庭と保育所との同一視がみられた。他方、ある程度の経験を積んだ男性保育者は家庭と保育所とを同一視していない。そしてZ氏もまた、家庭と保育所とを同一視していない。Z氏は保育所を集団保育の場であるにとらえ、集団生活のなかでの子どもの発達への働きかけを重視する。Z氏は「保育者」を「子どもの発達をうながす者」と定義する。

現在のZ氏が、X氏やY氏、あるいは15年目までのZ氏と大きく異なるのは、女性の優れたところを取り入れようという意思である。男性に特有の保育であるか否かといったことや、自分の存在意義を他者に認めさせられるかということは、

Z氏にとってそれほど意味を持たない。例えばZ氏とX氏が共に出会った、人見知りをする0歳児についての対応をみると、経験の少ないX氏は人見知りの理由を男性という属性に結びつけて説明するが、Z氏はそれを子どもの個人差を理由に説明する。また「子どもを包み込む」行為についてみると、Y氏はそれを女性に特有の保育であると解釈するのに対し、Z氏はそれを「スキップ」と意味づけ、保育者の性的属性にかかわらず子どもに必要なことだと判断する。このように、Z氏には女性と比較し勝ち負けを競うという発想はないし、男女どちらの性的属性を持つ者が保育者として適しているのかということを考慮することもない。なぜなら「男性だからってそんな特別の感じ方はない」からである。彼は「男性保育者」の代表ではないし、女性保育者ひとりひとりと「女性保育者」の代表ではない。彼も以前は「男性保育者」の代表として「男の保育」をしていたかもしれないが「今は『男の保育』を意識しないし、そんな保育をやろうとも思わない」とする。保育は個々人の経験や知識の差によって決まるのであり、性的属性はそれほど意味がないとZ氏は考えている。つまり彼が現在行っている保育は、Straussのいう「過去の、かつてそうであった私と同じではない」別の保育であるといえよう。

このように経験年数の多い男性保育者は「保育者」を「子どもの発達をうながす者」と定義する。そしてその定義にもとづいて「子どもの発達をうながす働きかけ」をすることが明らかになった。

IV. 男性保育者であり続けること

男性保育者の「保育者」定義について経験年数を手がかりにみた。Straussが示すとおり、「保育者」定義の移行はある程度制度化されており、共通した一連のシーケンスがあるといえるのではない。そこには3つの段階がある。第1段階は経験の少ない者が定義する「第二の家庭の父」とその定義に即した「身体を使う」保育、第2段階はある程度の経験を積んだ者が定義する「保育の

偏りを是正する者」とその是正のために行う「男性の視点」を強調した保育、第3段階はかなりの経験を積んだ者が定義する「子どもの発達をうながす者」とそのための働きかけというシーケンスである。この移行は3名のみではなく、保育職を継続する男性に共通する段階的变化と考えられる⁽³⁾。

シーケンスについて論じる Strauss に従えば、次の段階への移行は経験年数だけではなく、何らかの出来事が必要になる。では、次の段階への移行はどのような出来事を契機としてなされるのか。それを議論する前に各々の段階にある男性保育者の「保育者」定義について詳細にみていく。

男性保育者の「保育者」定義を概観するなかで注目に値するのは、男性保育者の「保育者」定義が、従来考えられてきた「保育者」定義とは大きく異なるという点である。従来「保育者」には、女性で優しく世話好きでケア労働を好む、といったイメージが付随していた。これらのイメージは女性というジェンダーとの関連で作られたものである。だが男性保育者はこの「保育者」イメージを引き受けない。男性保育者は女性というジェンダーとの関連で「保育者」を定義づけるのではなく、それとは別の解釈にもとづいて「保育者」を定義する。そしてその定義にもとづいて「男性」という属性と「保育者」とを結びつけようとする。

では男性保育者は「男性」と「保育者」とをどう結びつけているのか。保育者になってまもない男性保育者が定義する「第二の家庭の父」は、保育者の定義のなかに「男性」というジェンダーが深く入り込む。彼らは「父代わり」として「身体を使った保育」をしているからである。他方、経験を積んだ保育者が定義する「子どもの発達をうながす者」は「男性」というジェンダーがそれほど意味を持たない。保育者の定義のなかにも、彼がそれに即して遂行する保育にも、ジェンダーは入り込まない。

ところが第2段階にあたる「保育の偏りを是正する者」では、保育者の定義と実際に行われる保

育との間にずれがある。彼らが「保育の偏りを是正」するのは、日本の保育界の進展のためである。偏りを是正するために、彼らはあえて「男性の視点」を強調し男性というジェンダーに即して保育をする。だが彼らは保育界それ自体がジェンダーを帯びているとは認識していない。それに、たとえ保育の場で性別役割分業が行われたとしても、それは家族のなかで発生するそれとは全く別のものである。第1段階の保育と第2段階の保育は、一見同じ「男性」というジェンダーに関連した保育を遂行しているようにみえるかもしれないが、その内実は全く異なっているのである。以上のことから、男性保育者の「保育者」定義のシーケンスには、男性というジェンダーに関連づけられたものからそうでないものへと移行はみられるものの、その移行はそれほど単純ではないといえる。

それではなぜ男性保育者は「保育者」をジェンダーに関連づけて定義するのか。そして、どのような出来事を契機にして、ジェンダーに関連づけずに「保育者」を定義し、次の段階への移行するのか。それを解く鍵になるのが女性保育者の保育との接触である。

そもそも男性保育者は保育職参入以前には「保育者」を「ケア労働を好む」や「女性」といったようにジェンダーに関連づけて定義していない。X氏、Y氏、Z氏は「保育者」を「一生続けられる仕事」「発達教育」「社会福祉」といったように、ジェンダーに関連づけることなくそれとは別の解釈枠組を用いて「保育者」を定義する。ところが、X氏とZ氏は就職、Y氏は2年目のクラス担任をきっかけに、「保育者」と「男性」との関係を俎上にのせざるをえなくなる。

保育者になってまもない男性保育者が「男性」というジェンダーに関連した保育をするのはいつか。X氏の場合は女性の行う保育を目の当たりにした後、Y氏はともにクラス運営を任された女性保育者にY氏の保育を非難されて以降、Z氏は女性に注意された後であった。彼らはそれらの出来事

をきっかけに、女性の保育と自分の保育とを比較し、「女性に負けない」と対抗意識を燃やして、女性とは異なると他者から判断される保育をしようとする。つまり女性保育者との接触、特に「女性保育者の保育」との接触という出来事が、男性保育者の「保育者」定義を再編成するのである。男性保育者の「保育者」定義を再編成し、変容させるのは、経験年数だけではない。「女性保育者の保育」に接触したという出来事の実験が次の段階への移行をうながすのである。

「女性保育者の保育」とは、保育のスタンダードとして長年培われてきたものである。一般的に考えて、男性は保育者である以上、女性保育者の保育を土台として、自らの保育を形成しなければならない。それにもかかわらず男性は、女性とは異なる保育を選択しようとするのはなぜか。注目すべき点は、女性保育者の側が男性保育者に求めるのはこれまで女性保育者が行ってきた保育のスタンダード、すなわち「女性保育者の保育」よりもむしろ「男性保育者の保育」にある点である。男女保育者は互いに同じ「保育者」とであると認識していない。そのため男女保育者が「保育者」として行う保育の照らし合わせは、「女性保育者の保育」「男性保育者の保育」という、限定された枠内でのみ行われる。

男性の保育職参入をきっかけに、「女性保育者の保育」「男性保育者の保育」という2つの「保育」が突如としてあらわれる。「保育」という職務は、男性の保育職参入をきっかけに、ジェンダーを基準にして2つにカテゴリー化されるのである。例えば0,1歳児などの低年齢児の保育は「女性保育者の保育」の範疇に入れられる。それは、Y氏、Z氏が女性保育者に言われた「男性は乳児に向かない」「男性だから大丈夫かな」という言葉からうかがえる。女性保育者にとって低年齢児保育は「女性保育者の保育」なのである。

Y氏は、0歳児の保育を「男性保育者の保育」の範疇に入れようと試みている。Y氏が女性保育者に対して0歳児保育の問題点について意見を

述べたのは、「客観的」な「知識」という資源を用いて、それまで「女性保育者の保育」の範疇にあった0歳児保育を男性である自分に見合うように変化させ、「男性保育者の保育」へと取り込むためである。だが女性保育者の反発によってY氏はそれを「男性保育者の保育」に取り込むことができなかった。女性保育者は、Y氏の持つ保育者としての経験や知識、男性保育者が保育者として培ってきた浅い歴史よりも、女性保育者たちが培ってきた経験や歴史のほうが優位であると感じたからである。女性保育者に反論されたことにより、Y氏は、低年齢児保育は女性に適しているのだと感じる。結局、彼は低年齢児の保育を「男性保育者の保育」に取り込むことに失敗し、低年齢児の保育は「女性保育者の保育」の範疇にあるということを再確認しただけだった。つまり、Y氏と女性保育者との関係がぎくしゃくしたのは、低年齢児保育の位置づけが不安定になり、その取り込みをめぐる男女保育者が対立したからといえよう。

女性保育者は男性にすべての「保育」を明けわたすことを拒否し、男性保育者に対して「男性保育者の保育」という枠を設けることを求め、残りの部分を「女性保育者の保育」として自らを守ろうとする。このことが男性に「男性保育者の保育」以外で自分の保育を確立させることを困難にさせるのである。

ではなぜ女性保育者は「女性保育者の保育」に固執するのか。このことは保育職がいかにジェンダーに規定されているかということに関連する。保育職は、女性性というジェンダーを基準にしてカテゴリー化されている職業であり、女性保育者自身も、それについて疑うことはない。ところが男性が保育職に参入した途端、女性保育者にも、「なぜ女性は保育者であり続けるのか」という疑問が立ちあらわれ、女性の存在意義が危うくなってしまう。女性保育者が「これまでどおりで何が悪いのか」と反論するのは、自分の立場を守るためだといえよう。だがそれは男性保育者も同じで

ある。男性は「女性保育者の保育」を取り込もうとしない。なぜなら「女性保育者の保育」を取り込むと、存在意義が危うくなるからである。つまり男女保育者は同じ土俵に立っていないのである。

もっとも男性が行う「男性保育者の保育」は、女性の保育とは全く別のものではない。女性保育者が「身体を使う」保育や「どっしり座った保育」をすることもあれば、主任などの地位に就いて保育所の運営に深く関わることもある。「男性保育者の保育」とは、女性しかいなかった保育の場で女性が行ってきたものとは異なると他者から判断される保育をさす。男女保育者にとって必要なのは相手より優位に立つことである。それによって自分の立場を守り、自分の存在意義を認めさせることができるからである。一方の性的属性に偏っているのなら、保育者は自分の存在意義を他者に認めさせるためにジェンダーというレトリックを用いる必要はない。もし保育者が男性だけ、女性だけで占められているのならこのレトリックの強調はあまり意味を持たないだろう。男女保育者がジェンダーというレトリックを用いてしまうのは、男性の参入により性的属性がクローズアップされたためにジェンダーによってしか保育を語れないような状況が発生してしまうからである。

男性保育者が「保育者」をジェンダーに関連づけて定義するのは、「女性保育者の保育」の接触という出来事経験による。だがこれは男性保育者に限られたことではない。女性保育者も、男性保育者の参入をきっかけに「保育者」をジェンダーに関連づけて定義するようになるからである。

では男性保育者が「保育者」をジェンダーに関連づけずに定義するきっかけになる出来事とは何か。Z氏は、経験豊富な女性保育者と保育観を議論しあえたことではじめて「保母にもいい人がいる」と女性保育者を認めることができるようになる。なぜならZ氏は「保育者」として、その女性保育者と同じ土俵で議論しあうことができたからである。その女性保育者自身も保育経験を積み重

ねによって「女性保育者の保育」にこだわる必要性を感じなくなっていたと考えられる（中田，2004）。だからZ氏に対して「男性保育者の保育」を求めなかったのである。Z氏は彼女との相互作用によってはじめて「保育者」の照らし合わせが可能になった。その結果Z氏は「女性保育者の保育」、「男性保育者の保育」という限定された枠から逃れて「自分の保育」を確立することができるようになったのである。

V. おわりに

経験年数を手がかりに、男性保育者の「保育者」定義のシーケンスをみた。そこには「第二の家庭の父母」、「保育の偏りを是正する者」、そして「子どもの発達をうながす者」という一連のシーケンスがあった。この移行をジェンダーに関連づけて概観すると、ジェンダーに関連づけられたものからそうでないものへという移行がみられる。だが男性保育者は「保育者」を女性というジェンダーとの関連で定義していない。むしろ男性というジェンダーとの関連で定義づけ、それに即した保育を遂行しようとしていた。このような男性保育者の「保育者」定義の移行をうながすのは「女性保育者の保育」との接触である。男性の存在により男女保育者の間で「保育者」定義をめぐる争いが生じる。なぜなら「保育者」定義は保育者の存在意義にかかわる重要な問題だからである。

ところで元来「保育者」定義は他者の期待によって形成されるものであり、男性の「保育者」定義を再編成させるのに重要な役割を果たす女性保育者も、他者に期待された「保育者」定義を疑うことなく引き受けていると考えられる。だが男性保育者の存在をきっかけに、社会が、保育所が、そして女性保育者自身が持っていた「保育者」像は徐々にゆさぶられていく。これらが、男性と同じ現場で働く女性保育者だけでなく、保育所所長や子どもの保護者といった多くの他者を巻き込み彼らの期待を変化させ、「保育者」定義を再編成さ

せる契機となるといえるのではないか。「保育者」定義の変化とは、男女保育者に限った認識の変化をさしているわけではないのである。さらにその変化は単なる認識だけの問題にはおさまらない。例えば男性の参入とそれとともなう従来の「保育者」定義の変化は、女性がほとんどを占めていた時にはそれほど問題視されていなかった、賃金、制度面の不備を可視化させる結果になっている。つまり「保育者」定義の変化は、保育職そのものが変化するひとつの要因になりえるのである。男性保育者自身の「保育者」定義移行の最終段階は、保育職それ自体が新たにたどりつく方向性を示しているのかもしれない。

【付記】

本稿で使用した調査の一部は 2000 年度笹川科学研究助成をうけて行われた。調査実施にあたって全国男性保育者連絡会の方々に多大なご教示とご協力をいただいたことに深甚の謝意を表する。

【注】

- (1) 2002 年の全保育士のうち男性の割合は約 1% である。『社会福祉施設等調査報告』によると、1976 年に 191 人だった男性保育士は、1990 年には 713 人、2002 年には 3000 人を超えて

いる。

- (2) この 3 名は、経験年数の差以外の共通点（4 年制大学卒、民間保育所勤務、関西圏に居住、職業継続している）を条件に筆者が選択した。
- (3) 今回対象にした男性保育者 21 名にも共通した段階がみられた。また量的分析でも経験による「保育者」定義の移行がみられた（中田、2002）。

【文 献】

- 中田奈月、2002、『男性保育者』の創出：男性の存在が職場の人間関係に及ぼす影響『保育学研究』（日本保育学会）、40(2): 8-16.
- 中田奈月、2004、「男性保育士の低年齢児保育担当の困難」『保育士養成研究』（全国保育士養成協議会）、21: 19-27.
- Strauss A., 1959, *Mirrors & Masks: The search for identity*, Free Press. (片桐雅隆訳、1997、『鏡と仮面：アイデンティティの社会心理学』世界思想社).
- West C., Zimmerman D., 1987, "Doing gender," *Gender and Society*, 1: 373-387.
- Wharton A., Baron J., 1987, "SO HAPPY TOGETHER?: The impact of gender segregation on men at work," *American Sociological Review*, 52: 574-587.
- Williams C., 1992, "The glass escalator: Hidden advantages for men in the "female" professions," *Social Problems*, 39(3): 253-267.